

八・神田佐久間小学校の学童疎開

山本 泰秀

昭和十六年（一九四一）十二月、日本は世界中を相手に戦争を始めた。

太平洋戦争である。日々戦況が悪化する中、昭和十八年（一九四三）に入り主要都市への空襲の可能性が高まるにつれ、地方への疎開が叫ばれ始めた。

昭和十九年三月三日、政府は「一般疎開促進要綱」を閣議決定した。この頃戦火はいよいよ増し、首都東京への空襲の危険が迫った昭和十九年七月初めより、神田佐久間小学校の学童疎開が始まった。田舎に親戚のある人は縁故疎開をし、縁故のない人は学校でまとめて集団疎開をした。昭和十九年八月二十五日のことである。校長の訓話後、先生方に引率され児童は学校を後にした。

都電の浅草橋までの道は、見送りの家族の人々で大変な行列であった。

浅草から貸し切りの東武鉄道の電車に乗り、草加で六年生の男子と四年生の女子が降り、越ヶ谷駅で三・四・五年生の男子が降り、武里駅で三・五・六年の女子が降りた。各自の持ち物は布団一組、衣類などを入れた柳行李一個、学用品、洗面道具一式、食器、学用品を入れるリンゴ箱一個とされていた。これらの持ち物は、何日か前にその宿泊地とされる所に送られていた。

越ヶ谷駅に降りた学童は真夏の暑い中、隊列を組んでリュックを背中に背負い、増林村まで歩き、林泉寺、勝林寺へと向かった。

両寺が越ヶ谷駅降車組の宿舎であった。

次に表を明記する。

町村名	訓練数	寮母数	従業員数	施設名	学年男女	児童数
潮止村	三人	一人	一人	西蓮寺 普門寺	六年・男 六年・女	四七人 五三人
増林村	四人	三人	四人	林泉寺 勝林寺	五年・男 三・四・男	四九人 五二人
桜井村	四人	三人	四人	林西寺	三・四・五・女	一一七人

『新編千代田区史』

右記区史とは若干の相違はあるが、神田佐久間国民学校の児童であり、疎開時に林西寺の六年女子であった井上ハルミ氏（二〇〇七年当時・大袋在）の談によると、「埼玉県南埼玉郡増林村勝林寺に三・四年の男子、林泉寺に五年の男子、潮止村の普門寺に六年の男子、西蓮寺に四年の女子、桜井村の林西寺に三・五・六年の女子と五つの寺に分散して男女別全寮制寺子屋教育が始められた」と言う。

勝林寺に赴いた先生は、女性の赤荻先生、男性の岡本先生、漆野先生、それに寮母。

女性の先生と寮母は本堂の中二階を宿舍とし、児童は本堂を二部屋に仕切り、三年生・四年生と分かれてそれぞれ寝泊まりした。秋の新学期の始まる頃、佐久間国民学校の児童は、地元の増林国民学校を訪れた。代表児童が挨拶を述べた折、都会の子として堂々としたその態度に増林の児童はびっくりしたという。岡本先生は体育の先生であった。児童は朝八時過ぎに本堂で授業を受け、午後には自習の日課であった。門外に出ることは許されず、本堂で相撲をとったり、ふざけっこをしたり、庭に出てはボール蹴り遊びに興じていた。

勝林寺の裏手の古利根川で川を挟んで松伏赤岩の子供達と石の投げ合い合戦をしている増林の子供のために、佐久間小学校の児童が石を拾い集めてくれることもあった。しかしながら、彼らは直接石投げに参加することは無かった。

疎開後一か月程も絶つと休みの日に父母が面会に訪れて来て雑談をしたりしていたが、必ずしも全員の児童の元へ親が来たわけではなく、寂しい思いをする子もいた。住職の妻であり私の母から聞かされた話である。

各地の集団疎開の学童は、どここの学寮でも同じ様子であった。生活そのものは、疎開地により一様ではなく、共通項を見出すのは難しいが、空腹と不衛生はほぼ共通の体験であった。食料事情の悪さ、週一回から二回の入浴の為にダニ、シラミに悩まされ、疥癬が蔓延し「水銀軟膏」を頭に塗ったり、梳き櫛で頭の髪をとかしたりしたが、余り効果が無かった様であった。ここ増林地域の食料事情の悪さもやはり同じであった。農家自体も大変厳しい状態だった。

耕作反別から家族分を割り出し、残りの米は国へ供出、米の作柄が悪く、国からの供出分の割り当てに不足した農家は、近所の人から購入してまでも間に合わせたのだ。通常の食事さえ、米の余裕がなく、米に麦を混ぜたり、米少々に麦とエンドウ豆の乾燥品を入れて炊きこんだり、麦とジャガイモの混合であったり、水団、うどんやジャガイモ、サツマイモ、カボチャの雑穀食であった。

押しなべて、疎開児童の食も同じようであった。戦後八〇年の今年の読売新聞紙上（二〇二五年八月二十六日夕刊）にもアブラゼミや持参した錠剤を食べたという話が掲載されている。

昭和二十年八月十五日、教師・児童は疎開先で終戦を知った。勝林寺にいた児童も寺のラジオで終戦を知ることになった。学寮日誌の一部を左記に記す。

【昭和二十年八月十五日（水）】

終戦の大詔ヲ拝聴、正午陛下ノ御放送アリ、職員児童共ニ拝聴、感慨無量、歴史ノ大転換ニ直面、茫然タリ」（『勝林寺学寮日誌』）より

学童疎開はその後八ヶ月続き、昭和二十一年三月になりようやく東京に帰還できたのだった。

参考文献：『創立九十周年記念誌 千代田区立佐久間小学校』『新編千代田区史』

『千代田教育百年史』『語りつぐ平和の願 千代田区』